

吉野作造記念館を訪ねて

元古川高校教員 後藤一蔵

吉野作造記念館のすぐ目の前を東北新幹線が走っています。

吉野が東京に向かった明治のなかごろ、古川から東京に行くまでに要した時間は今日の比ではありません。吉野を東京に駆り立てたのはなんだったのか、私には興味があります。時代の如何を問わず、多くの人はずっと心に思い描いたとしても、具体的行動に移すことなく、自らの心の中で妥協点を見出し自らを納得させ、形としては表われないうかが多いのではないのでしょうか。

吉野作造について何も知らない私が、あえての外れを覚悟して言うならば、吉野が古川という地に生まれたことに人生の最初のシナリオの鍵があったように思われます。

吉野が古川の地を離れたのは、新しい古川町が誕生したばかりの時でした。行政的には江戸時代から長い間続いてきた「むら」という枠組みが外れ、明治政府の命令で、まさに「ごった煮」とよばれる状態になりました。そこには、当然のことながら、地域のまとまりは少しも感じられませんでした。一日も早く古

川町にふさわしい新しい生活の枠組みが求められました。その

ためには、それを理論的に支える考え方がどうしても必要だったので。人一倍感受性の豊かであったと言われる吉野にとって、そのような状況は幼心を揺さぶったと考えるのはいかがなものでしょうか。吉野はそのような思いを抱きつつ、尋常中学校（現仙台一高）、旧制二高の生活を通じて、自分の問題意識を深め、厳しい社会状況の当時、東京に向かったのではないのでしょうか。明治二〇年代の日本各地

において、古川町が置かれていた問題は同じように起こっていました。吉野の問題意識は古川から日本、そして世界をも一定の視座におさめるようになっていったように思います。

年少の頃の体験や見聞が人生を左右するというのを、あらためて考えさせられます。

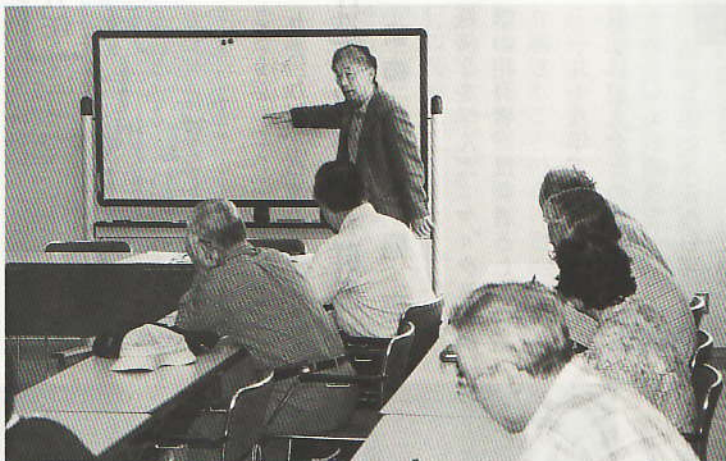
今年の三月、古川高校第一学年の生徒を対象に実施している吉野作造記念館見学のときに、頭をよぎったのはまさにそのことでした。

記念館に対する、生徒の感じ方が異なることは言うまでもあ

りません。「終了の時刻だけを心待ちにする生徒」もいれば、

「吉野という人物に触れて、多少の興奮を覚える生徒」もいたかもしれません。しかしながら、そこに参加したすべての生徒は一定の時間、その思いの違いはあっても、吉野という人物と向かい合っていたという点では共通性を持っています。古川高校一年生の二時間という時間だけに限って言えば、吉野という人物の影響にそれなりの差が生まれたといってもいいでしょう。しかし、これからの人生において、その違いが固定化されたままの状態では推移するかと、どうもそうはならないように思います。見学の際に、ほとんど意識しなかった吉野作造が、生徒個々のこれからの人生にどのような影響を与えるのかということは、なかなか予見できるものではありません。

高校生にとって、吉野作造記念館に足を運ぶことに意味があり、きわめて短時間の過ごし方を云々することは避け、遠くから見守っていかうと考える今日この頃です。



吉野作造講座の様子（後藤一蔵氏講師）



古川高校見学の様子